

〈書評〉

諏訪部浩一著

『アメリカ小説をさがして』

(松柏社、2017年)

横 山 晃

『アメリカ小説をさがして』は独特な形式をとっている。第一部を構成するのは著者による過去の論集であり、第二部には「人間対コンピュータ」と題された、2013年に開催された将棋の電脳戦に関する所見を皮切りに、王座観戦記、全国将棋サミット記念講演、そして東京大学のシンポジウムでのスピーチが収められている。このような構成に至った経緯は「あとがき」で触れられているが、本書の特殊な形式は、それがあある意味で著書の自伝となっていることを示唆する。

第一部の論集は発表された順に並べられている。これらの論文を貫く問題意識を導入する序章は置かれていないものの、「ロマン主義と自意識の葛藤」(414)が関心事であり続けたと「あとがき」で述べられているように、ロマンティックな欲望とその失敗というストーリーを展開する小説の構造に着目する著書の論は、必然的にロマンティックな主体と他者の関係にフォーカスすることになる。その際とりわけ重要となるのが、「フィクション」と「小説」の違いであろう。第二章において著者は社会通念を一つの「フィクション」とみなし、「小説」とは現実の「フィクション」化に抵抗する表現形態であると提示する。「社会通念とはそれを通してしか他者を理解することができない人々が、自分が理解することが出来ない他者と出会ったときに作り上げてしまう『現実』なので

あり、それが社会通念として機能してしまうのは、その括弧付きの『現実』を真の現実と人々が信じてしまうからに過ぎない(58)。現実の「フィクション」化とは他者との出会いを契機に始まり、そして「フィクション」は次に現実を生むため、「小説」を考えることとは、他者がどのように表象されているか、という問いに対峙することである。他者とは、「フィクション」の外にいる。主体はそれを希求しつつ、つながることはない。むしろ、つながりを希求しつつ、つながることの不可能性が他者を他者たらしめる。それは主体のロマンティックな欲望の頓挫を意味し、その記録が「小説」という形をとると著者は示す。換言すれば、外部は無いというポストモダンの観点から見たときに、埒外にいる他者を何らかの形で表象しうるのが、著者の着目するポリフォニックな「小説」のありようである。

著者のロマンティックな欲望への関心は、第一章において受動性と能動性の間に揺れるニック・キャラウェイの語りの姿勢を前景化し、第三章においては「愛」という概念を浮かび上がらせる。「『愛』というものが内面化・言語化を阻むものとして設定されているということが、作者が自己批評性を突き詰めていったことの帰結である」(117)。第三章以降の論文では、ヘミングウェイ論でも明らかなように、著者にとってジェンダーをめぐる問題がひとつの論点になる。実際、第八章で再び『ギャツビー』が論じられる際、ニックのうちに共存する受動性/能動性は、ジョーダン・ベイカーという自立した女性との関係で重要性を持つことが示される。ニックは他者であるジョーダンをギャツビーの「神話生成プロジェクト」に組み込もうとするが、うまく行かない。だが「〈他者〉であり続ける」(250-51)ジョーダンの存在こそが、「ニックのモノローグ的な『ロマンス』」を「フィッツジェラルドのポリフォニックな『小説』」へ変える、と著者は論じる(251)。そして外部としての他者は、キャラクターのレベルにおいてだけでなく、「小説」の構造においても重要な分析対象となる。第七章では「黒衣の道化師」を『行け、モーセ』内にどう位置付け直すかという問いに対し、ライダーがマッキヤスリン一族の黒人であるという解釈をとり、いかにこの話が「『全体化』への抵抗を体現したもの」、あるいは「アイクという白人男性の『悲劇』の構造的外部」であるように見えつつも(197)、『行け、モーセ』にポリフォニックな「小説」としての統一性を与えているか、ということを明らかにする。そして第十章においてアンダソンの提示した「グロテスク」を「ロマンティック」なものとなす著者は(283)、「自己表現の失敗こそが自我を担保するというロマンティックな主体構造」(288)を『ワイン

ズバーグ・オハイオ』の人々に見出す。著者による「フィクション」と「小説」の区別を思い返すならば、「自己表現の失敗」そのものはグロテスクではない。その失敗に気づかないことが、人をグロテスクにする。そして「小説」とは「フィクション」化された現実のグロテスクさを暴くものであろう。既に引用した箇所を再び参照するならば、「フィクション」、つまり「括弧付きの『現実』を真の現実と人々が信じ」続けることはいかにもグロテスクである（58）。

これら十本の論考を読んだ後、「小説」を語らねばならない語り手に着目する著者がなぜこれらの論を書かなければならなかったのか、という点を読者は考えることになるだろう。文学研究者としての人生を「第二の人生」（304）と呼ぶように、将棋から文学研究へと転向することは著者にとって全く違う人生を歩むことだったと想像される。しかしそこに「断絶がない」と言う著者は、将棋に捧げた人生こそが、アメリカ文学研究者になった原因であるように感じられると言う。それはもちろん、「原因と結果が逆になっている」（346）のだが、実際に文学研究「以前」の人生が第一部ではなく第二部で語られている、という点において本書は著者にとってやはり自伝的な形式をとっていると言えよう。第二部の各章を構成する原稿も第一部から引き続き、発表された順に収録されている。しかし第一の人生を回顧的に語るという行為が本書に統一感を与えていることは確かである。

『アメリカ小説をさがして』というタイトルの由来を説明する際、「何かを探していたらアメリカ小説に出会った」（412）と著者は言う。将棋で負けることの厳しさと自我形成を語る著者にとって、漠然とした「何か」が「アメリカ小説」となる過程にフォークナーとの出会いがあったことは間違いない。「フォークナーという天才に出会って、しっかりと打ち負かされることの意味を実感できたのは僥倖だった」（304）。フォークナーに「打ち負かされ」た経験とは、著者が文学研究者となった原因であり、そこで経た自我形成のプロセスは本書の第一部と第二部の間に横たわっている。それは断絶でありながら断絶ではない。そして『アメリカ小説をさがして』というタイトルは、著者による現在の語りを相対化する。アメリカ小説の探求が未だ完結していないことを示唆するこのタイトルは、本書の構造が実践的に提示するように、現在における選択の意味とは、未来においてこそ与えられることを物語るのである。